様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １４ 日現在

機関番号：３３２０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４６３３

研究課題名（和文）学校のパフォーマンスと教員のメンタルヘルスに関する実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study of organizational performance and teacher mental health in schools

研究代表者
水上　義行（Mizukami, Yoshiyuki）

富山国際大学・子ども育成学部・客員教授

研究者番号：２０５５５１９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、小学校教員のストレスやメンタルヘルスの実態を明らかにするとともに、学校現場において「組織の健康」を達成できる組織風土や学校経営のあり方について明らかにすることを目的とした。
　視察調査では、学校経営の観点から考察を行った。質問紙調査では、小学校教員のストレス要因、ストレス反応、個人要因、職場風土等について現状把握を試みた。フィールドワークでは、小学校の巡回や校長へのインタビューを行い、学校のパフォーマンスについて考察した。管理職を対象としたグループインタビューでは、教員の資質や学校環境をテーマに話し合いを行い、回答内容について解析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　小学校教員のストレス状況を把握するとともに、教員の精神的健康に関するリスクを高める要因やリスクを低減する要因を明らかにした。また、フィールドワークやグループインタビュー等により実践知を抽出し、学校という組織の出力と教員の健康とを両立できる学校経営について提言を行った。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to elucidate the actual state of stress and mental health in elementary school teachers, as well as to identify school management models and organizational culture that enable attainment of a “organizational health” in the school environment.
 In the inspection survey, discussion was conducted from the perspective of the school management. The questionnaire survey attempted to comprehend factors of stress, reactions to stress, personal factors, and work culture among current elementary school teachers. Fieldwork involved visiting elementary schools, conducting interviews with school principals, and discussing school performance.
 Themes such as teacher quality and school environment were discussed in the management group interview, and the results analyzed.

研究分野：学校経営

キーワード：学校経営　教員　ストレス　メンタルヘルス　組織風土

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

我が国に競争型の教育政策が導入され、学校教育においても学校ごとのパフォーマンスが重要視されるようになっており、学校組織の活性化が求められている。学校が高い出力を持続的に維持するためには「深層の競争力」の強化と、その基盤となる「組織能力」の向上が求められる。一方、いくら学校の出力が高くとも、その戦略が組織を構成する教員にとって過剰なストレス負荷となれば学校組織に定着しパフォーマンスを安定的に供給することは不可能である。教員自身が元気でいきいきと仕事をすることがよりよい教育実践につながることは経験的には論を待たないであろうが、これに関する実証的な研究はほとんど行われていない。パフォーマンス向上と教員の健康を両立させ、むしろ両者が相互作用的に強化される組織を構築することが望まれる。

２．研究の目的

教員のストレスやメンタルヘルスの実態を明らかにするとともに、学校現場において「組織の健康」を達成できる組織風土や学校経営のあり方について、特に管理職の機能に着目して検討を行うことを目的とした。

３．研究の方法

研究 1 では富山県外の学校への視察調査を行い、学校経営的な観点から教員のメンタルヘルスに関する考察を行った。研究 2 では「ストレス要因と職場のサポート」、「ストレス反応」、「個人要因」、「職場風土」等についての質問紙調査を行い、その結果を集計し分析することにより現状把握することを試みた。研究 3 では富山県内の各学校の巡回等を行い、現場の声を直接聞き、その結果について考察を加えた。研究 4 では本テーマについて、関係者のグループインタビューを行い、その結果を分析した。

４．研究成果

(1)視察調査

①目的と方法

学校研究を設定し、日常的に学校研究に取り組んでいる学校は多いと思うが、中でも最も難しい課題に挑戦している「研究開発校」の教員たちはストレスを感じないのかが気になった。ここでは、長期にわたって研究開発学校を経験してきた上越市立大手町小学校を取り上げ、聞き取り調査を行った。

②結果

聞き取りをしたのは、大手町小学校が何度目かの文部科学大臣指定研究開発校となった平成 24 年から 26 年に大手町小学校の教頭と研究主任を務めた二人である。特にその時期は、「資質・能力を発揮するための６領域と真の自立過程、学びの時間による教育課程の創造」を行っており、その年の研究紀要後書きは、校長の言葉が書かれている。「理論上手の授業下手であってはならない。」つまり、大手町小学校教員が大切にしていることは「子どもの事実で研究を語ること」であり、それは大手町小学校教員に常に共有されていることなのである。

大手町小学校では、一つの実践を行うのに、同学年を担任する教員２人でチームを組み、先輩教員が先に実践を行い、若手教員はその実践から学ぶ。「授業協議会」は一週間後に計画され、十分に実践を検討したレポートが「授業協議会」の一週間前に各教員から出される。このようにして、授業の着眼点が共有されていく。

学校研究を推進するに当たって、管理職のもつ力は大きく温かいものとなっている。例えば教頭は実践した教員に対し「自分がいいと思うものはどんどんやろう」と励まし、校長は「模倣は実践を腐らせる」として禁止する。実践や子どもたちに対し、常に誠意をもつことを大切にする教員を求めているのである。

このように先輩教員がリーダーとなり、管理職が励まし、伸びやかな校風によって教員たちは伸び伸びと実践に向かうことができ、ストレスが少ない職場になっているのであろう。

(2)質問紙調査

①目的

小学校教員の業務負担、精神健康度、プレゼンティーズム、パーソナリティ、職場のサポート、組織風 土等の状況を明らかにし、各要因の関連について検討する。

②方法

質問紙調査の実施にあたって、富山市教育委員会および富山市小学校長会に説明を行い、了承を得たうえで実施した。平成 30 年 12 月下旬に、各学校に調査用紙を配布した。調査結果は研究目的にのみ使用すること、回答は統計的に処理すること、調査への参加は自由意思によるものであること、調査に参加しなくても不利益は生じないこと等について、対象者に文書にて説明を行った。調査は、無記名で自己記入式 にて行った。記入済みの調査用紙は、個々に封入した後、学校ごとにまとめて郵送にて回収した。返送期限は、平成 31 年 1 月 21 日を目安として提示した。

対象は、富山市内の小学校に勤務する常勤の教員を対象とした。富山市内の全小学校 66 校の常勤教員 1,361 名を対象とした。そのうち、回収できた調査用紙は 63 校 1,066 名（回

収率 78.3%）であった。
　質問項目は次のとおり。【基本属性】 性別、年代、学歴、婚姻状況、職種、雇用形態、教職歴、当該校勤務年数、【ストレス要因と職場のサポート】 業務負担感は「教員勤務実態調査（文部科学省，2016）」の業務分類から作成、職業性ストレス簡易調査票（BJSQ）の量的負担、コントロール度、上司支援、同僚支援、【個人要因（パーソナリティ）】 日本語版 Ten Item Personality Inventory（TIPI-J）、【ストレス反応等】ユトレヒト・ワーク・エンゲイジメント尺度、非特異的心理的ストレス尺度（K6）、健康と労働パフォーマンスに関する質問紙（短縮版）、【組織風土】 組織風土尺度 12 項目版（OCS-12）
③結果
　仕事の量的負荷、仕事のコントロール、上司の支援、同僚の支援、組織風土、パーソナリティ等を説明変数とし、K6 を目的変数とする一般化線型モデル（リンク関数：ロジット）で解析を行い、オッズ比と 95%信頼区間を算出した。仕事の量的負荷、組織風土の伝統性、パーソナリティの情緒不安定性が教員の精神的健康に関するリスクを高め、コントロール、同僚の支援、組織環境性、パーソナリティの外向性と同調性がリスク低減に関連していた。
　また、教員の業務負担感軽減へ向けた第一歩として、その因子構造について調べた。探索的因子分析を行い、候補となる幾つかの因子構造を抽出した後、確証的因子分析を行った。7 因子構造におけるモデル適合度が最も優れていたため、7 因子構造と決定した。抽出された 7 因子は、それぞれ、「授業と学級経営」、「事務」、「外部対応」、「生徒指導」、「教科外活動」、「学校運営」、「研修」、と命名した。

(3)フィールドワーク
①目的
　学校が高い出力を備えた、パフォーマンスの持続を図るための方策を、校務を司る校長の取り組みから検討する。
②方法
　学校の自主性･主体性で､高い出力を発揮している研究先進校の研究会に参加して知見を得る。また､富山県内公立小学校の 50 名余の学校長へのインタビュー調査を試み､富山県教育委員会、市町村教育委員会、各種教育研究団体等の取り組みを通して、　小学校現場の実態を明らかにする。その上で、管理職の機能の強化と強力な教師集団づくりにかける、学校長の取り組みを注視して、望ましい学校経営のあり方を探った。
③結果
　訪問調査からは、地域や学校の特色を最大限に生かそうとする管理職の姿が、教員や子ども、保護者、地域からの信頼を得てスムーズな学校経営がなされていた。
教員は、多忙であっても多忙感がない職場環境で自信をもち、より一層の高みを目指して何事も前向きに取り組み、教員としてのスキルアップを目指している。純真無垢な子どもの健全な育成は、教員の生きがいであり夢である。崇高な職業であることを改めて実感することができた。
　各学校は、大量採用時代を迎えて、若手教員の指導が課題となっている。訪問調査からは、学年のチームワークや授業の見える化、教員生活への意欲の向上などを日常的に意識化して、教員同士の絆が深まる職場環境の持続を図っている学校が効果を上げていた。しかしながら、組織の一員としての自覚の足りない教員や、教員としての資質・能力の低下、子どもとの信頼関係の築けない教員の現状も報告されていた。
　学校は、急激に変化する社会情勢の中で、過去の方策が通用しにくい現状に悩んでおり、新しい課題に対して、一人一人の教員の能力を最大限に生かした組織体をどのように構築していくかが問われる時代に入っている。

(4)グループインタビュー
①方法
　「力のある教員の養成は、教育界の喫緊の課題」をテーマに、対象者計 9 名（校長先生 4 名、教頭先生 5 名）が３つのセッションにわたって、話し合った内容について、テキストマイニング（単語頻度分析、階層クラスター分析、共起ネットワーク分析、対応分析）の手法で分析を行った。具体的には、１「管理職に登用されるための資質」、２「競争社会を生き抜く教師に求められる資質」、3「理想の学校環境」に関して話し合っているセッション部分を抽出、コード化し、解析には、計量テキスト分析システム KHCoder（Ver.3.0）を用いた。
②結果
　セッション１では、校長先生らの話す内容は、ほぼ同じであり、追いかけたいと思える校長先生像なる存在を持っていた。そして、信頼や憧れを各先生方から集められるような存在であること、気楽に近づいてもらえるような雰囲気を持っていることが、管理職に登用されるための資質として捉えていた。一方、教頭先生らが話す内容は、多岐にわたっていたが、帰る時間が遅くなってしまうものの、仕事を前向きに捉えられることが、管理職に登用されるための資質として捉えられていた。
　セッション２では、子供たちへの愛情を持ちながら、貪欲さをはじめしなやかさ、柔軟さ等があること、富山をよく知る富山博士であること、何か一つ飛び抜けた深い知識も持つということが、これからの競争社会を生き抜く教師に求められる資質と校長先生らが捉えていた。一方、教

頭先生らは、若い頃にいろんな経験をある程度自由にさせてもらえる環境に加え、管理職にも恵まれることとの相互作用があることによって、様々な変化にも対応でき、臨機応変に切り替えられる資質が養われるとした。また、40 代、50 代の教員へのメンタルヘルスについての対策も示唆され、これに打ち勝つための資質向上が課題とした。

セッション３では、現状維持は後退であるとした上で、理想の学校環境とは、自分のやりたいことを実現できるという自信と見通しを持たせてあげられるような職場環境であるとし、“厳しい仲良し”も大切であると校長先生らが捉えていた。一方、教頭先生からは、「弱音」を「吐く」ことができるといった単語が、共起関係の強い形態素として示されていた。その際、つらさを共有できる仲間の情緒的サポートや管理職が受け止めてくれる評価的サポートが必要であることも示唆された。そして、どこへ向かっていけばよいのか、といったビジョンが示された環境であれば、見通しを持って、職場全体で頑張ることができると捉えていた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 水上義行，稲寺秀邦，瀬戸健，村上満，大平泰子	４．巻 12
２．論文標題 学校組織における管理職機能の強化と強力な教師集団組織化への提言	５．発行年 2020年
３．雑誌名 富山国際大学子ども育成学部紀要	６．最初と最後の頁 79-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 水上義行	４．巻 第8巻
２．論文標題 現場教員のメンタルヘルスを配慮した、学校のパフォーマンス改善法の経験的研究 ―射水市立小杉小学校における教員協働と学校便りの分析―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 富山国際大学子ども育成学部紀要	６．最初と最後の頁 125-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 大平泰子，松村健太，稲寺秀邦，村上 満，水上 義行，瀬戸 健
２．発表標題 小学校教員の精神健康度に関連する要因
３．学会等名 第2回日本心身医学関連学会合同集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 松村健太，稲寺秀邦，大平泰子，村上 満，水上 義行，瀬戸 健
２．発表標題 教員の業務負担感に関するアンケート調査：因子構造の解明
３．学会等名 第2回日本心身医学関連学会合同集会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	瀬戸　健 (Seto Ken) (30510036)	富山国際大学・子ども育成学部・教授 (33202)	
研究分担者	稲寺　秀邦 (Inadera Hidekuni) (10301144)	富山大学・学術研究部医学系・教授 (13201)	
研究分担者	村上　満 (Murakami Mitsuru) (10555197)	富山国際大学・子ども育成学部・教授 (33202)	
研究分担者	大平　泰子 (Ohira Taiko) (00555188)	富山国際大学・子ども育成学部・准教授 (33202)	
連携研究者	松村　健太 (Matsumura Kenta) (30510383)	富山大学・学術研究部医学系・特命助教 (13201)	